

Title	「何もしないのが肝心」： オスカー・ワイルドにおける怠惰な知のスタイル
Sub Title	The importance of doing nothing' : styles of radical idleness/laziness in Oscar Wilde
Author	石川, 大智(Ishikawa, Daichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.77 (2023. 3) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20230331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「何もしないのが肝心」
——オスカー・ワイルドにおける怠惰な知のスタイル¹⁾

石 川 大 智

*Our epoch has been called the century of work. It is in fact the century of pain, misery and corruption. [. . .] O Laziness, have pity on our long misery! O Laziness, mother of the arts and noble virtues, be thou the balm of human anguish!*²⁾

Like most of my generation, I was brought up on the saying: ‘Satan finds some mischief still for idle hands to do.’³⁾

*The daily round I’ll gladly shirk,
I would be idle too;
Thank goodness there is still some work
An Idler does not do.*⁴⁾

1. はじめに——「現在のロンドンには怠け者が多すぎます」

1895年2月14日にロンドンの St James's Theatre にて初演がなされたオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854–1900) の喜劇『まじめが肝心』(*The Importance of Being Earnest*) の第1幕にて、主要登場人物の一人ブラックネル卿夫人 (Lady Bracknell) は、自らの娘グウェンドレン (Gwendolen) の結婚相手候補として29歳のジョン・ワーシング [ジャック] (John Worthing) を品定めする際、まず 'Do you smoke?' と尋ねる。ジャックがためらいの後、正直に 'Well, yes, I must admit I smoke' と言うと、ブラックネル卿夫人は 'I am glad to hear it. A man should always have an occupation of some kind. There are far too many idle men in London as it is' と切り返す⁵⁾。怠け者が跋扈する現在のロンドンにおいて男が結婚条件の一つを満たすには、日々せっせと喫煙に「従事」すれば良いというワイルド一流の皮肉である。その後、第1幕の別な場面には、ジャックと友人のアルジャーノン (Algernon Moncrieff) が夕飯後に何をすべきか決める場面がある。アルジャーノンが 'Well, what shall we do?' と訊くと、ジャックは 'Nothing!' と応える。それに対しアルジャーノンは、'It is awfully hard work doing nothing. However, I don't mind hard work where there is no definite object of any kind' と述べる。世紀末の怠惰な男たちにとっては、何かのために働くことが重労働なのであると同様、何もしないこともまた大変な骨折りを要求する仕事なのである。少なくともアルジャーノンにとっては、労働意欲が湧くことがあるとすれば、これといった目的のない場合に限るのだという逆説がここにある⁶⁾。つづく第2幕において、ハートフォードシャー (Hertfordshire) にあるマナー・ハウスを訪れたアルジャーノンは、そこのセシリー嬢 (Cecily Cardew) と次のような会話を交わす。アルジャーノンが月曜朝の始発列車でロンドンへ上京しなければならないと言いながら、仕事の約束をどうしてもすっぽかしたいのだからと眩

くと、セシリーは ‘Couldn’t you miss it anywhere but in London?’ と畳み掛けるが、約束はロンドンなのでそうはいかないとアルジャーノンは返す。そこでセシリーはこのやり取りを美的立場から転覆せんとばかりに ‘Well, I know, of course, how important it is not to keep a business engagement, if one wants to retain any sense of the beauty of life’ と述べることで、仕事の予定を抱える者が「人生の美しさ」を理解する心を保つのがいかに難しいのかを浮き彫りにするのだ⁷⁾。

本論文では、ワイルドの文学における「無為 (idleness)」や「怠惰 (laziness)」といった一見軽やかな喜劇的概念を、これらの発言以前のワイルドの芸術論を中心としてより「真面目に」解剖していくことにする。そもそもワイルドにおける「無為」や「怠惰」といった概念は、彼をとりまく唯美主義および後期ヴィクトリア朝時代のより広い知的文脈において一体どのような文学的、社会的、ひいては政治的な意味合いを帯びていたのか。本論考ではこの点を、特にワイルドの美的哲学の起源と発展に着目しつつ探ることを目的とする⁸⁾。ワイルドにおける ‘idleness’ や ‘laziness’ は、彼がオクスフォード大学時代に出会い心酔していく文人批評家ウォルター・ペイター (Walter Pater, 1839–1894) の特に「ワーズワス」論 (‘Wordsworth’) で展開された美的哲学の洗礼を浴びる形で、その後のワイルドのキャリア全体にわたって重要な批評的位置付けを得ることになる。以下では、この鍵となる概念がペイターから始まりワイルドに受け継がれつつも、その性質を徐々に変えながら消化 (昇華) され独自の色を獲得していく過程を、いくつかの代表的なテキストの比較分析を通して主にインターテクスチュアリティの観点から詳らかにする。

ワイルドが生きた 19 世紀後半へと至る知的文脈を理解する上で、ヴィクトリア朝文学・文化研究の立役者の一人であるウォルター・E・ホートン (Walter E. Houghton, 1904–1983) が 1957 年の著書 *The Victorian Frame of Mind, 1830–1870* の第 10 章 ‘Earnestness’ で次のように述べているのは見逃せない。

If the importance of being earnest was first recognized about 1830 – on the threshold of the Victorian era—we can be sure that people had begun to feel a danger or an evil in not being earnest. [. . .] In the 1830's the most sensitive minds became aware that England was faced by a profound crisis. The intellectual world, the Christian Church, and the social order were all in grave peril, to be averted only by the most earnest search for saving ideas and the most earnest life of moral dedication. And yet people were going about their business – their pleasure rather—as if they had nothing to do but to eat, drink, and be comfortable; which seemed to Newman and the Evangelicals, to Carlyle and Thomas Arnold, not to mention Utilitarians and Broad-churchmen and Cambridge Apostles, just about the best possible way to bring on the destruction that was threatening both Church and State. [. . .] To play with words was just as shameful as to play with ideas. The style of wit, paradox, and epigram, so characteristic of eighteenth-century taste and so natural for a dandy, became intolerable.⁹⁾

ホートンはまず、‘earnest’であることの重要性が（ヴィクトリア朝時代が始まる直前の）1830年頃に初めて市民権を得たとすれば、その頃までには「真面目ではない」ということが社会的に危険視され、悪事とみなされ始めたと言えるのだろうと述べる。彼はまた、1830年代にはおよそ有識者と呼べる者ならば皆、イングランドは深刻な宗教的そして国家的危機にあると感じていたはずであり、それを防ぐ手立ては‘earnest’という言葉が体现するように、物事を徹底的に（真面目に）追求する他なかったのだとも指摘する。ホートンによれば、言葉との戯れも思想の戯れと同じく‘earnest’の対極にある恥ずべき行為とみなされ、それ以前の時代に流行ったウィットやパラドクス、エピグラムなどのダンディらしい趣味も許容されなくなっていくという訳である。

この指摘は、表面上は 19 世紀前半を分析したものでありながら、世紀後半のワイルドが直面したはずの社会背景を語る際にも十分有効であろうと思われる。現に、ホートンの指摘の行く先を示すかのようなワイルド自身の「真面目な」様子が窺える書簡が存在する。ワイルドは 1885 年 7 月 20 日付のジョージ・カーゾン (George Curzon, 1859–1925) 宛の書簡で次のように懇願していた。

Dear Curzon, I want to be one of Her Majesty's Inspectors of Schools! This is ambition—however, I want it, and want it very much, and I hope you will help me. Edward Stanhope has the giving away and, as a contemporary of mine at Oxford, you could give me great help by writing him a letter to say (if you think it) that I am a man of some brains. I won't trouble you with the reasons which make me ask for this post—but I want it and could do the work, I fancy, well. [. . .]

I hope to get this and to get it with your approval and your good word. I don't know Stanhope personally and am afraid he may take the popular idea of me as a real idler. Would you tell him it is not so?
In any case, ever yours

OSCAR WILDE [以下、下線部強調は全て引用者による]¹⁰⁾

1885 年時点のワイルドは、オクスフォード大学詩学教授にもなったマシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822–1888) が 1851 年から 1886 年まで務めた国家的キャリアである視学官 (Her Majesty's Inspector of Schools) のポストに有り付くべく、ここで保守党政治家のカーゾンに必死に応援を求めている。書簡の終わりで、ワイルドは自らが世間的に「根っからの怠け者 ('a real idler')」とみなされている事実を自覚しており、なおかつその評判を少なくとも表面的には否定しながら真っ当な仕事を得ようともがいてい

るのである¹¹⁾。「怠け者」としての自らの外的イメージと労働者としての現実的野心との狭間で葛藤するワイルドは、かつて同大学の最終試験で優秀な成績をおさめたにも拘らず大学に残れず、その後の国家的なポストにも手が届かず、ある意味ではやむなくジャーナリストの道へと歩み出すことになったとも言える訳だが、このような背景はその後の彼の自己成型を探る上でとりわけ大きな意味を持ちうる¹²⁾。

2. ワイルドにおけるペイターの「ワーズワス」論の影響

「無為」と「怠惰」をめぐるワイルド独特の知的身振り、すなわち本稿で「怠惰な知のスタイル」と名付けたものの起源と展開を見ていく際、彼の知のスタイルに最も大きな影響を与えた同時代人はペイターであろう。以下の議論では、ワイルドの「怠惰な知のスタイル」の起源を、1874年に『フォートナイトリー・リビュー』(*Fortnightly Review*)に発表され1889年の『鑑賞批評集』(*Appreciations*)に収録されたペイターによる「ワーズワス」論に求めていくが、その歴史的かつ批評的意義をワイルドのテキストに沿って確認する前に、まずはペイターの「ワーズワス」論の根底をささえる思想が述べられた箇所を見てみよう。ペイターはワーズワスの詩を、あらゆる偉大な芸術と詩と同様に、私たち人間存在の中に機械装置が侵入し支配力を振るうことに対しての絶えざる抗議のようなものである(‘Against this predominance of machinery in our existence, Wordsworth’s poetry, like all great art and poetry, is a continual protest’)とみなしながら、その論争的な性格に焦点をあてる¹³⁾。その上でペイターは、自らのワーズワス理解を‘contemplation’というキーワードに絡めて以下のように披瀝する。これはまた、ワイルドがペイターの『鑑賞批評集』の書評中で丸ごと引用するほどに重要視した箇所でもある。

That the end of life is not action but contemplation——being as dis-

tinct from *doing*—a certain disposition of the mind: is, in some shape or other, the principle of all the higher morality. In poetry, in art, if you enter into their true spirit at all, you touch this principle, in a measure: these, by their very sterility, are a type of beholding for the mere joy of beholding. To treat life in the spirit of art, is to make life a thing in which means and ends are identified: to encourage such treatment, the true moral significance of art and poetry. Wordsworth, and other poets who have been like him in ancient or more recent times, are the masters, the experts, in this art of impassioned contemplation. Their work is, not to teach lessons, or enforce rules, or even to stimulate us to noble ends; but to withdraw the thoughts for a little while from the mere machinery of life, to fix them, with appropriate emotions, on the spectacle of those great facts in man's existence which no machinery affects, 'on the great and universal passions of men, the most general and interesting of their occupations, and the entire world of nature,' —on 'the operations of the elements and the appearances of the visible universe, on storm and sunshine, on the revolutions of the seasons, on cold and heat, on loss of friends and kindred, on injuries and resentments, on gratitude and hope, on fear and sorrow.' To witness this spectacle with appropriate emotions is the aim of all culture; and of these emotions poetry like Wordsworth's is a great nourisher and stimulant. He sees nature full of sentiment and excitement; he sees men and women as parts of nature, passionate, excited, in strange grouping and connexion with the grandeur and beauty of the natural world:—images, in his own words, 'of man suffering, amid awful forms and powers.'¹⁴⁾

「ワーズワス」論のクライマックスでもあるこの部分には、同エッセイの

初出の前年である 1873 年に刊行された彼の『ルネサンスの歴史の研究』(*Studies in the History of the Renaissance*) を補足し発展させるかのようなペイターの唯美主義哲学が凝縮されている。ペイターは、人生の目的は ‘action’ ではなく ‘contemplation’ であり、‘doing’ ではなく ‘being’ にあると明言し、「観照的な生 (*vita contemplativa*)」を「活動的な生 (*vita activa*)」の上位に置く。芸術の精神で人生を扱うということは、見る喜びのためだけに見るという例が示すように、手段と目的とが同じものであるとみなすことに他ならない。ペイターはこのような精神こそが、人生においても詩や芸術においても、より高次の倫理道德をつかさどる原則であると述べるのだ。ワーズワスおよび彼の流れに連なる古今の詩人たちの本当の仕事は、教訓や法則を押し付けたり、何か偉大なる目的のために私たちを駆り立てることではない。ペイターによれば、その役割はむしろ、私たちの思想を機械的な日常生活の影響からしばしの間引き離してくれることにあるのだ。これにより、人間存在全体に関わるような偉大な事実を知ることができ、また様々な異なるシーンに合った心の動き (‘with appropriate emotions’) を感じながら、本来の「仕事 (‘their occupations’)」と呼ぶに堪える、より本質的で興味深いものごとに従事することができるようになるという訳である。そしてこれは、ペイターにとって「あらゆる教養 (文化) の目的」を達成するために欠かすことのできない、いわば「ある」ということを手段であり目的とする唯一の「仕事」そして「作品」(‘work’) とみなされていく¹⁵⁾。

ここで、労働を絶対視する近現代の傾向に対し、人間が何にも脅かされることなく真に人間的に生きることのできる空間としての「余暇 (leisure)」の重要性を、その祝祭性と共に唱えたヨゼフ・ピーパー (Josef Pieper, 1904–1997) の 1947 年のドイツ語の講演をもとにした『余暇と祝祭』(*Leisure: The Basis of Culture* [原題: *Musse und Kult*]) を引き合いに出すのは意味のないこととは思われない。プラトンとアリストテレスに遡りながら、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1225–1274) の中世を経由してピーパー

ーが想定した「余暇」とは、人間が自由や教養を保持し、世界を全体として見ることができる何よりも‘contemplation’のための空間であった。こう語るピーパーが同書で、第一次世界大戦の間に根絶やしにされてしまったと考える「芸術のための芸術」運動（‘art for art’s sake’）に言及しているのは決して偶然ではない。ピーパーはこの抵抗運動が不首尾に終わったと認めつつも、その立場は、利益一辺倒の世界的傾向に反抗して芸術の領域を守ることを意図したという点で大いに正当化されうるものであったのだと述べているのだ¹⁶⁾。このような系譜を踏まえると、ペイターが『ルネサンス』で披露した唯美主義がより直接的に近代イギリス文学の領域に持ち込まれたとも言える「ワーズワス」論は、単に何もせずに唯「ある」ことを唱える現実逃避的な哲学を標榜しつつも、他ならぬその存在「行為」によってこそ初めてその隠された社会性と政治性を露わにする論争的なテキストなのだとも言えよう¹⁷⁾。

それでは、ペイターの「ワーズワス」はワイルドへいかなる影響を与えたのだろうか。ペイターの個人的な依頼に促されるかたちで1890年3月22日の『スピーカー』(*Speaker*)に掲載された書評「ペイター氏の最新刊」(‘Mr. Pater’s Last Volume’)にて、ワイルドはペイターからの先述の長い引用を（以下の3つ目の省略部分に）挿入しつつ同エッセイを高く評価している¹⁸⁾。

I have suggested that the essay on Wordsworth is probably the most recent bit of work contained in this volume. If one might choose between so much that is good, I should be inclined to say it is the finest also. [. . .] [T]he essay on Wordsworth has a spiritual beauty of its own. It appeals, not to the ordinary Wordsworthian with his uncritical temper, and his gross confusion of ethical with æsthetical problems, but rather to those who desire to separate the gold from the dross, and to reach at the true Wordsworth through the mass of tedious and prosaic work that bears his name, and that serves often to conceal him

from us. [. . .] From the present volume it is difficult to select any one passage in preference to another as specially characteristic of Mr. Pater's treatment. This, however, is worth quoting at length. It contains a truth eminently suitable for our age: [. . .]

Certainly the real secret of Wordsworth has never been better expressed. After having read and re-read Mr. Pater's essay – for it requires re-reading – one returns to the poet's work with a new sense of joy and wonder, and with something of eager and impassioned expectation. And perhaps this might be roughly taken as the test or touchstone of the finest criticism.¹⁹⁾

ワイルドはここで、ペイターの「ワーズワス」論を文体的な観点より『鑑賞批評集』の中ではおそらく一番後に書かれたエッセイであると推測しているが、この推定は事実と反する。ペイターの「ワーズワス」は、『ルネサンス』出版の翌年の1874年3月に『フォートナイトリー・リヴュー』に発表された比較的若い頃のエッセイであるためだ。しかし他方で、見方を変えれば、ワイルドによるこの予測のズレは二つの重要な事実を示してくれもする。一つ目は、ワイルドがオクスフォード大学に入学した年である1874年に署名入りで発表されたペイターの「ワーズワス」論を、ワイルドはおそらくリアル・タイムでは読んではいなかっただろうと言うことである。ワイルドがペイターの「ワーズワス」を読んだ時期は、その15年ほど後、つまりこのエッセイが単行本に収録された1889年の『鑑賞批評集』初版の出版後間もなくの時期ということになるだろう。もちろん、この遅れはワイルドのそれまでのペイターへの無関心を意味しはしない。ワイルドの年代推定のささいな誤りが教えてくれる二つ目の事実は、むしろ彼がいかにペイターの「ワーズワス」を、実際の執筆年代に拘らず、ペイター批評の真髄に迫るものとして高く評価したかというその内容の方にある。ワイルドの書評でこのエッセイは破格の扱いを受けており、昔から

洗練されていたとワイルドが考えるペイターの文体と思想が、さらに洗練を重ねた末に生み出されたペイター文学芸術の到達点としての評価を受けているからである。すでに引用したペイターの「ワーズワス」論の記述は、現にワイルドによって引用する価値のあるものとみなされ、余す所なく引用されていた。ワイルドはその理由を、「私たちの時代に極めてふさわしい真実が含まれている」ためだと説明しているのである。

3. 「芸術家としての批評家」における無為と怠惰

ワイルドの「芸術家としての批評家」(‘The Critic as Artist’, 1890) は、前年に刊行されワイルドが書評を寄せたペイターの『鑑賞批評集』初版へのワイルドなりのレスポンスとみなすことができる。2部構成の対話形式の芸術論であるそのエッセイにおいてワイルドは、逆説家であるギルバート(Gilbert)の口を通して、「為す」ことに対する「ある」ことや、その延長としての話すことを含む言語芸術の優位を面白おかしく説くことになるためだ。この際、対話相手のアーネスト(Ernest)の立ち位置にも注目してみると、主に質問と相槌により友人ギルバートの議論を盛り立て整理するように、いわば「真面目な」聞き役として機能しているのは注目すべきことのように思われる。アーネストという名前は後に『まじめが肝心』においてより焦点化されて再登場するが、そこでは「真面目さ」という性質が「アーネスト」という交換可能な記号としての名前と重なり合ったり離れたりすることで、プロットの進行になくってはならない象徴的意味合いを帯びるのに対し、「芸術家としての批評家」でのアーネストは、文字通り「真面目な」存在に留まるのである。

「芸術家としての批評家」は、1890年の7月と9月の2回に分けて『19世紀』(*Nineteenth Century*)誌に掲載された後、1891年に『意向集』(*Intentions*)に収録される。元々のタイトルは、‘THE TRUE FUNCTION AND VALUE OF CRITICISM: WITH SOME REMARKS ON THE IMPOR-

TANCE OF DOING NOTHING: A DIALOGUE' という長いもので、第一義的にはアーノルドの 1864 年の講演録である「現代における批評の機能」(‘The Function of Criticism at the Present Time’) を明らかに意識している²⁰⁾。しかし、中身はそれにも増してペイターの唯美主義の影響を色濃く受けながら、やや極論も交えつつ創作に対する批評行為の優越を説き、同時に批評のもちうる創造性を称揚するという創造批評を提唱し、真の批評家とは何かという問題に迫った野心的な批評エッセイでもある。このエッセイでギルバートは、何かを語ることが何かを実際に行うことよりもいかに難しいことであるかを力説し、‘action’ に対する ‘talk’ の優位を主張する。

Gilbert. More difficult to do a thing than to talk about it? Not at all. That is a gross popular error. It is very much more difficult to talk about a thing than to do it. [. . .] Action, indeed, is always easy, and when presented to us in its most aggravated, because most continuous form, which I take to be that of real industry, becomes simply the refuge of people who have nothing whatsoever to do. No, Ernest, don't talk about action. [. . .] Its basis is the lack of imagination. It is the last resource of those who know not how to dream.

[. . .] Action! What is action? It dies at the moment of its energy. It is a base concession to fact. The world is made by the singer for the dreamer.²¹⁾

ギルバートによれば、‘action’ とは何かエネルギーを消費して行う実際の労働(‘real industry’)そしてその惰性に他ならず、それは「夢見る人」が行うべきことではないという理屈である。この後、彼はペイターの『ルネサンス』から「レオナルド・ダ・ヴィンチ」論(‘Leonardo da Vinci’)における「モナ・リザ」の有名な描写を長々と引用してみせつつ、音楽芸術

を、それ自体をいわば形あるモノとして表現しない芸術であるために逆にあらゆるものを露わにして表現することができるのだと理想化して語ることになる（‘And what is true about music is true about all the arts. Beauty has as many meanings as man has moods. Beauty is the symbol of symbols. Beauty reveals everything, because it expresses nothing’）²²⁾。これはもちろん、ペイターが1877年に発表し、1888年の『ルネサンス』第3版で初めて収録された「ジョルジョーネ派」（‘The School of Giorgione’）における諸芸術の関係を述べた名高い一節（‘All art constantly aspires towards the condition of music’）の反響でもあるが、ここではさらに「ワーズワス」論の美学哲学もブレンドされている点はそれぞれのテキストの緊密な内的連環を示す事実と言えるだろう²³⁾。

それでは、「何もしない」というワイルドの無為と怠惰の哲学を「芸術家としての批評家」の例を通してさらに検討してみよう。‘With some remarks upon the importance of discussing everything’ という副題を後に付与される同エッセイの第2部では、第1部の議論が反復されながら、前年のペイターの「ワーズワス」論で登場した ‘contemplation’ という言葉が鍵となっている。ギルバートによれば、一般社会においては ‘Contemplation’（ここでは大文字で始まる）はおおよそ市民が犯しうる最も深刻な罪とみなされているのに対し、最高の教養を備えた文化においては、それは人間が従事すべき「真つ当な仕事（‘the proper occupation of man’）」なのである²⁴⁾。こうして彼にとっての ‘Contemplation’ は、プラトンやアリストテレス、中世のキリスト教神秘主義における心のありようとしての、例えば智慧や知識や聖なるものを求める「熱情（‘passion’）」へと精神的に連なっていくが、これはペイターの「ワーズワス」論で述べられた ‘impassioned contemplation’ の文脈とも深い親和性を持つものである。ワイルドのギルバートは続いてアーネストの問いかけにこう答えている。

Ernest. We exist, then, to do nothing?

Gilbert. It is to do nothing that the elect exist. Action is limited and relative. Unlimited and absolute is the vision of him who sits at ease and watches, who walks in loneliness and dreams. But we who are born at the close of this wonderful age are at once too cultured and too critical, too intellectually subtle and too curious of exquisite pleasures, to accept any speculations about life in exchange for life itself.²⁵⁾

ここでギルバートは、「何もしないこと」が世界で最も難しく、最も知的な営為であるからこそ、それを実践できる「限られた者」にとってそれは生きる目的となりうるのだと説く。行動には限界があり、対象に合わせて刻々と変化しうるのに対し、ゆったりと腰掛けて観る人、すなわち孤独と夢の中に歩む者の前に広がる世界には限りがなく、その意味においてそこには何ものにも左右されぬ絶対性がある。しかしそれにも拘らず、この驚くべき、素晴らしき時代に生を享けた世紀末の我々は、自らの過剰な教養とあまりにも鋭敏な知性、悦楽への好奇心過多によって人生を生きるのに精一杯で、かえって人生について思い巡らす余裕が持てない。ギルバートはこのように（真面目さの象徴とも言える）アーネストを諭すことで、ワイルドがペイターから借り受けた無為と怠惰の美学を世紀末の知的風土へと接木しようとするのである。

ギルバートは続いて、この観照による人生が単に「ある（‘being’）」ことを目的とするのみならず、ひいてはより完全な存在へと「なっていく（‘becoming’）」という変化を伴う新たな存在の可能性を示すに至る。

Gilbert. Yes, Ernest, the contemplative life, the life that has for its aim not *doing* but *being*, and not *being* merely, but *becoming*—that is what the critical spirit can give us. The gods live thus: either brooding over their own perfection, as Aristotle tells us, or, as Epicurus fancied,

watching with the calm eyes of the spectator the tragi-comedy of the world that they have made. We, too, might live like them, and set ourselves to witness with appropriate emotions the varied scenes that man and nature afford. We might make ourselves spiritual by detaching ourselves from action, and become perfect by the rejection of energy. [. . .] From the high tower of Thought we can look out at the world. Calm, and self-centred, and complete, the aesthetic critic contemplates life [. . .]²⁶⁾

唯美的批評にとっては、観照を通して「ある」ことから、あたかも古代の神々のように、そしてペイターの 1885 年の長編小説『享楽主義者（エピクロスの徒）マリウス』（*Marius the Epicurean*）を連想させるエピクロスのように、自らの内なる完成を求めて何かに「なる」ことも重要なのだという訳である。この文脈においてもう一つ見逃すことができないのは、ワイルドが ‘with appropriate emotions’ というペイター由来の表現をこっそり織り込みながら、つまり自らの書評で高く評価した「ワーズワス」論へ再度言及しながら、この理想をギルバートに語らせているという点だろう。ギルバートは加えて、このようなペイター仕込みのワイルドの美的哲学が、世紀末へと突入したイングランドの支配的な労働観や価値観といかに対立しうるものであったかを指摘しつつ話を進める。

Gilbert. There is no country in the world so much in need of unpractical people as this country of ours. With us, Thought is degraded by its constant association with practice. [. . .] We live in the age of the overworked, and the under-educated; the age in which people are so industrious that they become absolutely stupid. And, harsh though it may sound, I cannot help saying that such people deserve their doom. The sure way of knowing nothing about life is to try to make oneself

useful.²⁷⁾

ここで新たにギルバートは、‘useful’ と ‘useless’，そして ‘practical’ と ‘unpractical’ という二項対立的な価値基準を逆説も交えて巧妙に転覆させながら、後期ヴィクトリア朝期のイングランドほど「实际的でない（役に立たない）人々（‘unpractical people’）」が必要な国はないと説くのである²⁸⁾。「何もしない」観照の美学のすすめからのこの突然の糾弾は、しかしもちろん、文明批評家としてのワイルドにとっては必然でもある。彼の仮面でもあるギルバートはだからこそ、現代を「働きすぎと無教養な人々の時代（‘the age of the overworked, and the under-educated’）」と告発しながら、あまりにも勤勉なあまり、人々は完全に愚かな存在に成り下がってしまったと嘆く訳だ。このように、「芸術家としての批評家」で展開された議論は、1891年2月の『フォートナイトリー・リヴュー』に掲載された長文エッセイ「社会主義下における人間の魂」（‘The Soul of Man under Socialism’）にて、今度はワイルド自身の声であらためて語られることで、芸術批評でもありながら、同時に社会・政治批評的でもありうる独自の色彩を強めていくことになる。

4. 「社会主義下における人間の魂」における無為と怠惰

ワイルドの「社会主義下における人間の魂」によれば、社会主義が価値を持つのは、（直感に反し）個人主義に結びつくからに他ならない。それは誰かのために何かをしなければならないという「する」ことの呪縛から脱することで初めて達成されるものである²⁹⁾。また、彼の ‘Disobedience, in the eyes of any one who has read history, is man’s original virtue’ という言葉に集約されるように、それは権威主義や全体主義とは無縁のものであり、それに抵抗することを美德とさえ捉えるものでもある³⁰⁾。その点で、ワイルドが唱える社会主義と個人主義とは、その共同体の構成員一人

一人の幸福を担保するという目的のもとに協力関係にあると言って良いだろう。逆にいえば、もしある社会が個々人の物質的・精神的な豊かさを犠牲にしなければ成り立たないのであれば、それは「全体主義的な社会主義（‘Authoritarian Socialism’）」として退けられるべきものとなる³¹⁾。この態度は、同エッセイ中に頻出する‘authority’あるいは‘authorities’という言葉がほぼ常にネガティブな意味合いで扱われていることから読み取れる。

このように、社会主義と個人主義の両立を図ろうとするワイルドが必然的に直面する問題が、私有財産の位置付けである。ワイルドの考えによれば、人類に普遍的な恩恵をもたらす社会主義は、私有財産を奨励せず、むしろ放棄することでこそ、より自由で研ぎ澄まされた強固なものになる。

Under the new conditions Individualism will be far freer, far finer, and far more intensified than it is now. [. . .] [T]he recognition of private property has really harmed Individualism, and obscured it, by confusing a man with what he possesses. [. . .] The true perfection of man lies, not in what man has, but in what man is. Private property has crushed true Individualism, and set up an Individualism that is false.³²⁾

ワイルドの社会主義にとって私有財産とは、真の個人主義の達成を阻むものとなりうるものである。なぜなら、何かを個人的に所有することを奨励する社会は、彼の議論に従えば、一見個人主義が尊重されているようにも見えるけれども、突き詰めれば人間性そのものを軽んじる社会とも言えるからだ。つまり、私的所有に基づく社会における人間の価値は、その人自身ではなく、その人が所有するモノによって判断されることになるためである。持てる者と持たざる者により二分化されるそのような見せかけの個人主義社会は、言い換えれば、「あること（‘being’）」よりも「持つこと（‘having’）」が重視される世界でもある。人間的な価値が物質的な価値へと

あまりにも安易に変換されうる社会においては、人間は真の個人性を剥奪され、単なる物質の媒介者へと成り下がってしまう訳だ。ワイルドはさらに、そのような所有に基づいた社会システムにおいては、人間は必然的により多くのモノを所有しようとするために、「過剰な労働（‘overwork’）」によって自らを殺すことになるだろうとも警告している（‘Man will kill himself by overwork in order to secure property’）³³⁾。ワイルドによれば、このような言わば19世紀版の過労死社会においては、人々は驚きや魅力的なもの、喜ばしいものといった「本当の生の喜びや楽しみ（‘the true pleasure and joy of living’）」を自らのうちに自由に育むことができなくなってしまう、不安に苛まれ続けることになる³⁴⁾。だからこそ彼は、‘To live is the rarest thing in the world. Most people exist, that is all’ と読者を一旦突き放しながら唯「ある」ことの質的意味を問い直し、私有財産をなくすことが真の意味で美しく健全な個人主義を手に入れることに繋がると救いの手を差し伸べるに至るのだ³⁵⁾。この状況においてワイルドは、‘What Jesus does say is that man reaches his perfection, not through what he has, not even through what he does, but entirely through what he is’ と述べることで、イエス・キリストの中に何かを所有したり為すことによってではなく、自分自身として「ある」ことにより完全性に到達するという理想の人間像を見てとっている³⁶⁾。

ワイルドは続いて、自らの理想とする社会主義を通しての個人主義を、それまでの権力（‘Authority’）についての議論を踏まえつつ新たに国家との具体的な関係性に当てはめて再提示し、よりラディカルな労働観および社会観を構築していくことになる。その過程で彼は、‘the State must give up all idea of government’ と述べつつ、様々な統治形態を退けながら ‘All modes of government are failures’ とさえ言い切っている³⁷⁾。芸術家にとって最適な統治形態は何かという周囲からの問いに ‘no government at all’ と答えながら、躊躇うことなく ‘all authority is equally bad’ と主張するワイルドは、その背景を次のように説明していた³⁸⁾。

The State is to make what is useful, the individual is to make what is beautiful. And as I have mentioned the word labour, I cannot help saying that a great deal of nonsense is being written and talked nowadays about the dignity of manual labour. There is nothing necessarily dignified about manual labour at all, and most of it is absolutely degrading. It is mentally and morally injurious to man to do anything in which he does not find pleasure, and many forms of labour are quite pleasureless activities, and should be regarded as such. [. . .] Man is made for something better than disturbing dirt. All work of that kind should be done by a machine.³⁹⁾

ワイルドは国家と個人の役割を明確に区別する。国家はあくまで「役に立つもの」を作るのに対し、彼の理想の社会における個人の役割は「美しいもの」を生み出すことである。彼はそう述べてつづき、肉体労働の尊厳を誇り美化するような当時の論調に痛烈な批判を加えていく。ワイルドにとって労働とは、多くの場合、人の尊厳や品位をひどく貶める有害で喜びのない行為に他ならず、そうである以上はまとめて機械にやらせるべきものだからである。このような発言は、カール・マルクス (Karl Marx, 1818–1883) の娘婿となったポール・ラファルグ (Paul Lafargue, 1842–1911) が 1880 年代前半に『怠ける権利』 (*The Right to Be Lazy* [原題: *Le droit à la paresse*]) の中で行った議論とも多くを共有するものである。

In proportion as the machine is improved and performs man's work with an ever increasing rapidity and exactness, the laborer, instead of prolonging his former rest times, redoubles his ardor, as if he wished to rival the machine. O, absurd and murderous competition!⁴⁰⁾

ラファルグが同時代のパリとロンドンの狭間で察知したように、ワイルド

の見た後期ヴィクトリア朝社会では機械と人間は共存することなく競合関係にあり、そこでは本来生産性を高め人間の要求に応えるはずの機械が一握りの人々の手により占有されることで、かえって多数の労働者の職を奪う結果をもたらし、貧困や窃盗などが引き起こされることになる。これに対し、ワイルドが掲げる理想の社会においては、人間は自ら楽しみ、労働ではなく「洗練された余暇（‘cultivated leisure’）」を享受し、美しいものを作ったり読んだりしながら、賞賛と歓喜の念で世界をじつくりと観照することになるという訳だ⁴¹⁾。このように、「社会主義下の人間の魂」に見られる痛烈な社会批評と政治的言説は、ペイターの唯美主義の影響を受けた「ワーズワス」における「観照」の美学をさらに先鋭化させた形で、ワイルドが考える最も個人主義的な営みとしての「芸術」と「芸術家」の社会的地位の復権という大きな目的を強調するためのある種のレトリックとしても有効に機能しているように思われる。

5. おわりに——芸術家としてのキリストに倣いて

以上、ワイルドの芸術批評から例を挙げつつ、ペイターの影響がワイルドへ至り、どのように受容され変容を遂げたかについて見てきた。ワイルドは『まじめが肝心』の初演の年である1895年に、男性間の同性愛に対し極めて厳格な当時の法律の裁きにより投獄されたが、その後1897年の初めに、獄中からアルフレッド・ダグラス [ボジー] (Lord Alfred Douglas, 1870–1945) に向けて執筆された所謂『獄中記』 (*De Profundis*; ‘Epistola: In Carcere et Vinculis’) の中には、以下のように、「社会主義下の人間の魂」における理想としてのキリスト表象を発展させたような記述とともに、ペイターへの言及が見られる。

[T]he artistic life is simple self-development. Humility in the artist is his frank acceptance of all experiences, just as Love in the artist is

simply that sense of Beauty that reveals to the world its body and its soul. In *Marius the Epicurean* Pater seeks to reconcile the artistic life with the life of religion in the deep, sweet and austere sense of the word. But Marius is little more than a spectator: an ideal spectator indeed, and one to whom it is given ‘to contemplate the spectacle of life with appropriate emotions’, which Wordsworth defines as the poet’s true aim: yet a spectator merely, and perhaps a little too much occupied with the comeliness of the vessels of the Sanctuary to notice that it is the Sanctuary of Sorrow that he is gazing at.

I see a far more intimate and immediate connection between the true life of Christ and the true life of the artist, and I take a keen pleasure in the reflection that long before Sorrow had made my days her own and bound me to her wheel I had written in *The Soul of Man* that he who would lead a Christ-like life must be entirely and absolutely himself, and had taken as my types not merely the shepherd on the hillside and the prisoner in his cell but also the painter to whom the world is a pageant and the poet for whom the world is a song.⁴²⁾

ここでワイルドは、ペイターはキリスト教勃興期の紀元2年のローマ帝国を舞台とした長編小説『享楽主義者マリウス』において、芸術的生活と宗教的生活をその深いところで調和させようとしたと述べる。しかしワイルドは同時に、主人公のマリウスを「眺める人（傍観者）に過ぎない（‘little more than a spectator’）」と評している。ワーズワスが詩人の真の目的として定義した「しかるべき心の動きで人生のスペクタクルをじっくりと鑑賞する（‘to contemplate the spectacle of life with appropriate emotions’）」人物であったという意味で、確かにマリウスはワイルドにとって「理想的な傍観者（‘an ideal spectator’）」ではあった。かつて何度も言及したペイターの「ワーズワス」論を、‘with appropriate emotions’という言葉と共に今度は獄

中で懐古するワイルドは、このように留保を付けた物言いでペイターを引用しながらも、ここで旧師の影響から少し距離を置くかのような素振りを見せているように思える。ワイルドはここで「社会主義下の人間の魂」を執筆した当時のことを思い出しつつ、キリストのような人生をおくる者こそが完全に自分自身であると言えるのだと書いた1891年当時の自分を、喜びをもって眺めることになる。ペイターのワーズワスの理想の傍観者を一人獄中で思い起こしながらも、むしろ真の芸術家としてのキリストのような人生の方により近い感情を抱くようになったワイルドの姿がここで俄かに浮き彫りになるのである。彼が崇拜したペイターはかつて、『ルネサンス』の唯美主義の結晶とも言える「結論」において次のように記していた。

Experience, already reduced to a group of impressions, is ringed round for each one of us by that thick wall of personality through which no real voice has ever pierced on its way to us, or from us to that which we can only conjecture to be without. Every one of those impressions is the impression of the individual in his isolation, each mind keeping as a solitary prisoner its own dream of a world.⁴³⁾

すでに一群の印象へと還元された経験は、「あの厚い個性という壁」に囲まれて孤立しており、獄中の真実の声は外部には直接伝わってこない。あくまで「孤独な独房の囚人」としての彼の精神は、しかしどうやら尚も「世界についてのそれ自身の夢」を紡いでいるように思われる。先ほどのワイルドによるペイターについての留保的な記述を併せ読む限り、少なくとも修辭的には、ワイルドが理想とした個人主義者としての芸術家の魂は、ここに来てついに「独房の囚人（‘the prisoner in his cell’）」の比喩に象徴される極めてペイター的な影響力から一歩抜け出したようにも読めてくるのだ。

最後に、これまでの議論を簡単に整理して結論とする。ワイルドの「芸術家としての批評家」は、前年の1889年に刊行されワイルドが書評を寄せたペイターの『鑑賞批評集』初版へのワイルドなりのレスポンスであるともみなせる。とりわけ、ワイルドが称賛を惜しなかったペイターの「ワーズワス」の章で展開される‘action’よりも‘being’を尊ぶ美的哲学は、それ以降のワイルドの著作に大きな影響を与えることになる。その影響は、プラトンの対話篇を意識した「芸術家としての批評家」のみならず、1891年の「社会主義下の人間の魂」や1895年初演の『まじめが肝心』、ひいては『獄中記』にも及ぶ極めて広範なものと言えるだろう。本論考では、多方面に展開するその複雑な知的影響関係を、テキスト間のネットワークの問題として追いかけてながら、それを歴史的・文献学的な視座から解きほぐし整理することを試みた。これにより、ワイルドの「怠惰な知のスタイル」とでも呼べる知的振る舞いが、単に美学的な領域に留まるものではなく、より広く社会・文化批評、ひいてはラディカルな国家統治不要論や労働改革論にも繋がりうる潜在力を秘めたものでもあることが明らかになった。

Notes

- 1) 本論考は、2021年9月18日にオンラインで開催された19世紀イギリス文学合同研究会準備大会（ディケンズ・フェロウシップ日本支部・日本ワイルド協会・日本ギヤスケル協会・日本ジョージ・エリオット協会・日本ハーディー協会共催）での著者による発表原稿をもとに、その後大幅な加筆修正を施したものである。本研究の遂行にあたっては、慶應義塾学事振興資金の支援を受けた。上記発表のきっかけを作って下さった川端康雄教授、当日の司会を務めて下さった原田範行教授、そして本論文の査読者2名にも、この場をお借りして厚く御礼申し上げる。
- 2) Paul Lafargue, *The Right to Be Lazy (le droit à la paresse)*, trans. by Charles H. Kerr (Chicago: Charles H. Kerr, 1975) [translated from the 1883 edition by Charles H. Kerr; reprinted from the 1907 Kerr edition with Introduction and Notes by Fred Thompson], pp. 41, 67.
- 3) Bertrand Russell, ‘In Praise of Idleness’, in *In Praise of Idleness and*

- other Essays* (Abingdon and New York: Routledge, 2004 [1st edn 1935]), pp. 1–15 (p. 1).
- 4) Vyvyan Holland, ‘A Few Odd Reflections on Idleness’, in Stephen Robins, *The Importance of Being Idle: A Little Book of Lazy Inspiration* (London: Prion, 2000; repr. 2001), p. 31. オスカー・ワイルドの次男ヴィヴィアン・ホーランド (Vyvyan Holland, 1886–1967) もまた、父親の遺志を継ぐかのように自らを「怠け者 (‘The Idler’)」として表現していた。ホーランドは会員制の愛書家クラブである Ye Sette of Odd Volumes の一員として執筆出版した限定 133 部の私家版 *The Mediaeval Courts of Love* の表題に ‘Idler to ye Sette’ と印刷しつつ、献呈用のページでは木にぶら下がるナマケモノの図柄の下に ‘IDLER’ と印字した特製マークを使用している程である。Holland, *The Mediaeval Courts of Love: A Paper Read before ye Sette of Odd Volumes at ye 421st Meeting of ye Sette, Held at the Royal Adelaide Gallery on February 22nd, 1927* [Privately Printed Opuscula Issued to Members of ye Sette of Odd Volumes. No. LXXXII.] (London: Privately printed [limited to 133 copies], 1927), pp. 1, 5.
 - 5) Wilde, *The Importance of Being Earnest: A Trivial Comedy for Serious People*, in *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 10: Plays 3*, ed. by Joseph Donohue (Oxford: Oxford University Press, 2019), p. 780.
 - 6) Wilde, *The Importance of Being Earnest*, pp. 786–87.
 - 7) Wilde, *The Importance of Being Earnest*, pp. 796–97.
 - 8) 18 世紀後半から 19 世紀末までのイギリス文学における ‘idleness’ についての総合的な精神 (文化) 史的研究としては、Richard Adelman, *Idleness and Aesthetic Consciousness, 1815–1900* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018) と Adelman, *Idleness, Contemplation and the Aesthetic, 1750–1830* (Cambridge: Cambridge University Press, 2011) を参照のこと。アデルマンは前者の第 4 章 ‘Cultural Theory and Aesthetic Failure’ においてジョン・ラスキン (John Ruskin)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold)、ペイターらにおける ‘idle aesthetic contemplation’ の系譜を主に分析しているが、ワイルドについては第 5 章の異なる文脈で簡単に触れているのみである。ワイルドにおける ‘idleness’ に直接的な言及のある文献としては Peter Womack, ‘Dialogue and Leisure at the Fin de Siècle’, *Cambridge Quarterly*, 42.2 (June 2013), 134–56 が特に有益だが、ウーマックの主眼は 19 世紀末における idleness 表象の文化史的な見取り図を描くことにあり、この主題を巡るワイルドとペイター間の密接な影響関係についての分析はなされていない。よって本論文では、アデルマンやウーマックらの有益な先行研究を踏まえつつも、そこで十分に描かれなかったワイルドの ‘idle-

ness’ に生じた内的変化を、特にペイターとの関係性のもとで新たに掘り下げることとする。

- 9) Walter E. Houghton, ‘Earnestness’, in *The Victorian Frame of Mind, 1830–1870* (New Haven: Yale University Press, 1957), pp. 218–62 (pp. 218, 222, 225).
- 10) Wilde, *The Complete Letters of Oscar Wilde*, ed. by Merlin Holland and Rupert Hart-Davis (London: Forth Estate, 2000), p. 264; Leanne Grech, ‘Civilizing England: Oxford, Empire, and Aesthetic Education’, in *Oscar Wilde’s Aesthetic Education: The Oxford Classical Curriculum* (London: Palgrave Macmillan, 2019), pp. 123–58 (pp. 131–33).
- 11) ここでワイルドのキャリア上のロール・モデルとなっているアーノルド自身は、35年にわたり務めた視学官の職務について ‘drudgery’ と形容しており、家族宛の書簡でも頻繁にその過酷さを吐露している。Stefan Colini, *Matthew Arnold: A Critical Portrait* (Oxford: Oxford University Press, 1994; repr. 2008), pp. 21–22.
- 12) Norman Page, *An Oscar Wilde Chronology* (Basingstoke: Macmillan, 1991), pp. 12, 31–32. ワイルドはこのカーゾン宛書簡の後、1886年2月後半に、かつての師である J・P・マハフィー (John Pentland Mahaffy, 1839–1919) に書簡を送り、視学官の職へのさらなる口利きを依頼している。‘I want you, if you would do it for me, to write to your friend Lord Spencer [The fifth Earl Spencer (1835–1910)], who is now Lord President of the Council, to make a recommendation of me as a suitable person to hold an Inspectorship of School. My name has been on the Education List for some time but a word from you as to my capacities would go far towards getting me what I want. I know Spencer has a great admiration for your powers and judgement’ (Wilde, *The Complete Letters of Oscar Wilde*, pp. 279–80).
- 13) Pater, ‘Wordsworth’, in *Appreciations: With an Essay on Style* (London: Macmillan, 1910; New York: Johnson, 1967), pp. 39–64 (p. 61).
- 14) Pater, ‘Wordsworth’, in *Appreciations*, pp. 62–63.
- 15) ケネス・デイリー (Kenneth Daley) は、「ワーズワス」論の中でペイターは、「観照的な生」と「活動的な生」とを対置しながら詩的観照によって人間存在をより高貴なる行為へと向かわせようとするルネサンス的のヒューマニズムの伝統を踏まえつつも、それを転倒させて活用していると指摘する。ペイターが ‘contemplation’ に込めた意味合いの複雑さを認めた上で、デイリーは、ここでペイターは「観照的な生」を極限まで突き詰めることによって、結果的に(ラスキンとは反対に)詩人から社会性や政治性を剥奪しているという。この指摘は少なくとも、ペイターの「無為」のすすめが

- 社会的・政治的性格を排除することによって、旧来の美学思想に対して新たな論争的性格を獲得している可能性を示唆するものであるように思われる。Kenneth Daley, 'The Wordsworth of Pater and Ruskin', in *The Rescue of Romanticism: Walter Pater and John Ruskin* (Athens: Ohio University Press, 2001), pp. 17–50 (pp. 30–35, 49–50).
- 16) Josef Pieper, *Leisure: The Basis of Culture*, trans. by Alexander Dru, intro. by T. S. Eliot (London: Faber, 1952), pp. 59–60. 古代ギリシアに遡る *vita activa* と *vita contemplativa* の 20 世紀への思想的展開については、Hannah Arendt, *The Human Condition*, foreword by Danielle Allen, intro. by Margaret Canovan, 2nd edn (Chicago: University of Chicago Press, 2018 [1st edn 1958]) が詳しい。
 - 17) ペイターの「ワーズワス」論を主に文体的実践の観点から保守派に対する論争的なテキストと捉え、『ルネサンス』の特に「結語」における唯美主義との連続性を指摘した実証的研究としては、野末紀之『文体のポリテクス：ウォルター・ペイターの闘争とその戦略』（東京：論創社，2018），pp. 59–103（pp. 60–72）の第3章が示唆に富む。
 - 18) Pater, *The Letters of Walter Pater*, ed. by Lawrence Evans (Oxford: Clarendon, 1970), p. 106.
 - 19) Wilde, *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 7: Journalism Part II*, ed. by John Stokes and Mark W. Turner (Oxford: Oxford University Press, 2013), pp. 243–47.
 - 20) Matthew Arnold, 'The Function of Criticism at the Present Time', in *The Complete Prose Works of Matthew Arnold: Lectures and Essays in Criticism*, ed. by R. H. Super (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1962), III, 258–85.
 - 21) Wilde, 'The Critic as Artist', in *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 4: Criticism: Historical Criticism, Intentions, The Soul of Man*, ed. by Josephine M. Guy (Oxford: Oxford University Press, 2007), pp. 123–206 (pp. 146–47, 150–51).
 - 22) Wilde, 'The Critic as Artist', pp. 156–58.
 - 23) Pater, *The Renaissance: Studies in Art and Poetry: The 1893 Text*, ed. by Donald L. Hill (Berkeley: University of California Press, 1980), p. 106.
 - 24) Wilde, 'The Critic as Artist', pp. 174–75.
 - 25) Wilde, 'The Critic as Artist', p. 175.
 - 26) Wilde, 'The Critic as Artist', pp. 178–79.
 - 27) Wilde, 'The Critic as Artist', pp. 179–80.
 - 28) 1872 年生まれのパートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872–1970)

は、‘Perhaps the most important advantages of “useless” knowledge is that it promotes a contemplative habit of mind. There is in the world too much readiness, not only for action without adequate previous reflection, but also for some sort of action on occasions on which wisdom would counsel inaction’ と述べている点でペイターからワイルドに至る 19 世紀後半の「観照」の美学を継承しているように思える。Russell, ““Useless” Knowledge’, in *In Praise of Idleness and other Essays* (Abingdon and New York: Routledge, 2004 [1st edn 1935]), pp. 16–27 (p. 25).

- 29) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, in *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 4: Criticism: Historical Criticism, Intentions, The Soul of Man*, ed. by Josephine M. Guy (Oxford: Oxford University Press, 2007), pp. 231–33.
- 30) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, p. 235.
- 31) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, p. 236.
- 32) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, pp. 237–38.
- 33) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, p. 238.
- 34) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, p. 238.
- 35) ブライアン・オコナー (Brian O’Connor) は、‘idleness’ の意味合いを哲学的側面から考察した著書において、これを ‘mindless’ や ‘irrational’ といった性質と区別しつつ、生のオルタナティヴとしての ‘idleness’ のもつ可能性を指摘している。Brian O’Connor, ‘Introduction: Philosophy and Idleness’, in *Idleness: A Philosophical Essay* (Princeton: Princeton University Press, 2018), pp. 1–24 (pp. 5–7).
- 36) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, pp. 240–44 (p. 241).
- 37) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, p. 244.
- 38) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, p. 261.
- 39) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, p. 246.
- 40) Lafargue, *The Right to Be Lazy*, p. 50.
- 41) Wilde, ‘The Soul of Man under Socialism’, pp. 246–47.
- 42) Wilde, *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 2: De Profundis, ‘Epistola: In Carcere et Vinculis’*, ed. by Ian Small (Oxford: Oxford University Press, 2005), pp. 35–155 (p. 109); Wilde, *The Complete Letters*, pp. 740–41.
- 43) Pater, ‘Conclusion’, in *The Renaissance*, pp. 186–90 (pp. 187–88).

Works Cited

- Adelman, Richard, *Idleness and Aesthetic Consciousness, 1815–1900* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018)
- , *Idleness, Contemplation and the Aesthetic, 1750–1830* (Cambridge: Cambridge University Press, 2011)
- Arendt, Hannah, *The Human Condition*, foreword by Danielle Allen, intro. by Margaret Canovan, 2nd edn (Chicago: University of Chicago Press, 2018 [1st edn 1958])
- Arnold, Matthew, ‘The Function of Criticism at the Present Time’, *The Complete Prose Works of Matthew Arnold: Lectures and Essays in Criticism*, ed. by R. H. Super (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1962), III, 258–85
- Collini, Stefan, *Matthew Arnold: A Critical Portrait* (Oxford: Oxford University Press, 1994; repr. 2008)
- Daley, Kenneth, ‘The Wordsworth of Pater and Ruskin’, *The Rescue of Romanticism: Walter Pater and John Ruskin* (Athens: Ohio University Press, 2001), 17–50
- Grech, Leanne, ‘Civilizing England: Oxford, Empire, and Aesthetic Education’, *Oscar Wilde’s Aesthetic Education: The Oxford Classical Curriculum* (London: Palgrave Macmillan, 2019), 123–58
- Holland, Vyvyan, *The Mediaeval Courts of Love: A Paper Read before ye Sette of Odd Volumes at ye 421st Meeting of ye Sette, Held at the Royal Adelaide Gallery on February 22nd, 1927* (London: Privately printed [limited to 133 copies], 1927)
- Houghton, Walter E., ‘Earnestness’, *The Victorian Frame of Mind, 1830–1870* (New Haven: Yale University Press, 1957), 218–62
- Lafargue, Paul, *The Right to Be Lazy (le droit à la paresse)*, trans. by Charles H. Kerr (Chicago: Charles H. Kerr, 1975)
- O’Connor, Brian, *Idleness: A Philosophical Essay* (Princeton: Princeton University Press, 2018)
- Page, Norman, *An Oscar Wilde Chronology* (Basingstoke: Macmillan, 1991)
- Pater, Walter, *Appreciations: With an Essay on Style* (London: Macmillan, 1910; New York: Johnson, 1967)
- , *The Letters of Walter Pater*, ed. by Lawrence Evans (Oxford: Clarendon, 1970)
- , *The Renaissance: Studies in Art and Poetry: The 1893 Text*, ed. by Donald L. Hill (Berkeley: University of California Press, 1980)
- Pieper, Josef, *Leisure: The Basis of Culture*, trans. by Alexander Dru, intro. by T.

- S. Eliot (London: Faber, 1952)
- Robins, Stephen, *The Importance of Being Idle: A Little Book of Lazy Inspiration* (London: Prion, 2000; repr. 2001)
- Russell, Bertrand, *In Praise of Idleness and other Essays* (Abingdon and New York: Routledge, 2004 [1st edn 1935])
- Wilde, Oscar, *The Complete Letters of Oscar Wilde*, ed. by Merlin Holland and Rubert Hart- Davis (London: Forth Estate, 2000)
- , *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 2: De Profundis, 'Epistola: In Carcere et Vinculis'*, ed. by Ian Small (Oxford: Oxford University Press, 2005)
- , *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 4: Criticism: Historical Criticism, Intentions, The Soul of Man*, ed. by Josephine M. Guy (Oxford: Oxford University Press, 2007)
- , *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 7: Journalism Part II*, ed. by John Stokes and Mark W. Turner (Oxford: Oxford University Press, 2013)
- , *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 10: Plays 3: The Importance of Being Earnest, 'A Wife's Tragedy (fragment)'*, ed. by Joseph Donohue (Oxford: Oxford University Press, 2019)
- Womack, Peter, 'Dialogue and Leisure at the Fin de Siècle', *Cambridge Quarterly*, 42.2 (June 2013), 134–56
- 野末紀之『文体のポリティクス：ウォルター・ペイターの闘争とその戦略』（東京：論創社，2018）